

産の忌みを中心とした出産の儀礼・習俗について

民俗班（徳島民俗学会） 関 眞由子¹⁾

1. まえがき

相生町における昭和10～20年代ころまでの出産は、嫁ぎ先の家で姑の介助を得ながら一人で行うことが多かった。医療設備が整っている現在と違って、当時の女性たちにとっての出産はまさに「命がけ」であったので、無事な出産を願って多くの儀礼や習俗が生まれ、また固く守られてきた。今回特に注目したのが火にかかわる禁忌で、徳島県の他の町村と同様に相生町においても、産婦や生児が「他者と火を別にする」ことが厳粛に守られていた。

調査については、相生町文化財保護委員の湯浅裕氏のご協力を得て、延野を中心に雄、鮎谷、谷内、竹ヶ谷、朴野の各地域の大正、昭和時代生まれの方々に、出産に関する質問20項目について聞き取りを行った。調査日は7月29、30日、10月27日に、それぞれ現地で取材した。産まれた子供の呼称は『民俗学事典』（柳田國男監修）に従い、生児とした。また、こうした儀礼や禁忌は、地域差もあるが家による違いも多く見られた。

2. 安産祈願と禁忌

「家」の存続を重視した時代において、女性に望まれた役割の第一は、跡継ぎの子どもを産むことであった。そのため女性たちは、神仏に子授けや安産を祈願することがあった。相生町では、石をお守りにする例がいくつか見られ、特定の石に対して子授けや安産の効力があると考えていたことがうかがえる。以下に事例をあげる。

事例①「日和佐のお薬師さん（薬王寺）の隠元さんのお墓の笠を欠いてくると子供が産まれる」といい、叩いて欠けた部分を持ち帰り、袋に入れて身に付けた。（朴野）

事例②志和岐（由岐町）の氏神さんはお産の神さんなので、「石を借りに行く」といって参詣後に石を一つ借りてお守りにし、無事に産まれると返しに行った。（朴野）

妊婦には多くの禁忌が課せられていたが、特に火事や葬式に対しては厳しかった。葬式は夫に対しても若干の禁忌が課せられる場合があった。以下に事例をあげる。

事例①火事を見た手で、腹部を触ると胎児にコトヤケ（^{あざ}瘡）ができる。（全域）

②お悔やみに行ってはいけない、もちろん葬式にも参加しない。（全域）

③妊婦の夫は葬式には参加するが、穴掘りと野辺送りはしない。（朴野）

④勝ち負けが生じ、花嫁に子供ができなくなると困るので、婚礼には出席しない。

1) 徳島市丈六町長尾62-15

(延野、朴野)

⑤蛇が蛙を呑んでいるのを見てはいけない。(延野)

⑥箒、こまし(むしろ とも)をまたぐと、お産が重くなる。(延野)

さらに延野や雄では便所を掃除するときれいな子供ができるともいわれていた。

妊娠5カ月日には「帯祝い」といって、はらおび腹帯を巻いた。犬のお産が軽いことから、これにあやかるように戌の日に行くが、巻くのは姑か、妊婦自身であることが多かった。

3. 出 産

嫁ぎ先の家での出産がほとんどで、産婦のことを古くは産人さんじんといった。産室には夫婦の寝室である奥の部屋を使用した。ゴザを敷いている家では箒に敷き換え、畳を敷いている家では畳を上げて箒を敷いて出産した。古くはさんだわら棧俵(米俵の両端に当てる円い藁製のふた)の上で出産すると安産になるともいわれていた。(鮎川、請ノ谷など)なお、『相生町誌』に「産湯をつかわした赤ん坊を藁二本並べ、その上に三度置いて産衣を着せた」とあり、出産時に藁の上に生児を置くことに大きな意味があったと考えられる。

姑は箒や古い布、産湯などを用意し、難産の時に背中をさするなどして産婦を助けた。産婦はしゃがんだ状態で、巻いた布団などにすがって出産することが多かった。延野近辺では昭和10年代以降、朴野、請ノ谷などは昭和25～26年以降には助産婦に依頼するようになったが、それまでは姑の介助によることが多かった。

生児のへその緒を切るのは産婦自身で、刃物ではなく「竹べらで切るもの」といわれていた。容易に切れないために切るまねごとをして、実際には鋏を使っていた。古くは、雨だれ落ちの石を拾ってきて敷き、竹べらで切っていたと伝えられている。(鮎川、請ノ谷など)昭和初期には最初から鋏で切るようになった。へその緒には特別な力があると信じられていたので、桐の箱などに入れて保管した。一生に一度命にかかわる病気にかかった場合にへその緒を煎じて飲ませるとよい、ともいわれていた(延野など)。万能薬として病名を問わず、大病にかかると少し削り煎じて飲ませることもあった(請ノ谷など)。また亡くなったときに「棺の中に入れる」ともいわれていた。皮膚病に効くという理由から、ガニババ(生児の最初の排泄物)を大切にしておくこともあった(鮎川、請ノ谷など)。

産婦は姑が用意した湯で産湯を使わせ、使用済みの湯は奥の部屋の座板を上げて床下に流した。このため、古くは奥の部屋の座板は、すぐにあげられるように釘を打っていないかった。家によっては、奥の部屋の窓の下に汚物入れとして置いたタゴ(堆肥を入れる桶)に捨てていた。

胎盤はあとざん後産とよばれ、古い布などに包んで埋めた。父親の役目とする家が多いが、地域によっては産婦がする場合もあった。時期は翌日というのが多いが、数日後という家もあ

った。いずれの場合にも乱雑な処理を避け、丁重に埋められた。場所については、古くは奥の部屋の床下が多かったと考えられるが、家によっても違いがあるので、事例をあげる。

事例①奥の部屋の床下を少し掘って埋めた。(雄、鮎川、など)

②家の裏の木の根元、また、茶畑を深く掘って埋めた。(谷内、朴野など)

③川原。水が出たときに流れていくように水辺の砂地に埋めた。(延野、朴野など)

④墓地の近くに埋めた。(延野など)

4. 産後の火を別にする習慣

産婦及び生児は出産後一定期間、奥の部屋から出ることを禁じられていた。出産にはケガレ(穢れ)があると考えられており、「死んだときよりもきつい(人が亡くなったときよりもケガレが多い)」といわれた。ケガレは火によって他に及ぶとされ、古くは出産のあった家の火を産火さんびといい、同じ火で煮炊きした物を口にしてはならないといわれていた。この習慣は昭和時代になって次第に薄れていったが、農家、特にしきたりを重んじる旧家などでは、厳粛にこれを守っていた。

事例①「産火なので」という理由から、7日間は来客があってもお茶を出さなかった。また、出産のあった家での飲食を避けた。(朴野、請ノ谷など)

②出産があった家の者は、共同作業の昼食時に飲む湯を自宅から持参し、全員用に沸かした大きなやかんの湯を利用せず、皆と少し離れて昼食をとっていた。(谷内)

いずれも、出産があった家族が遠慮をする形をとり、家によって相違があるものの、7日から1カ月の間、火を別にする習慣が守られていた。

厳格でない家でも、産婦と生児が7日間は奥の部屋から出てはならないとした例は多く、家によっては便所に行くことも禁止され、産婦は奥の部屋の窓の下にタゴを置いて用を足すこともあった。食事は姑が作ってくれるが、産婦と火を別にしなければならないので、産室には産婦用の箱膳を置き、部屋の前で移し替えていた。移すことにより、火が混ざること回避できる、と考えられていた。特に出産後3日間は「血が若い」ともいい、ケガレも多いとされ、「産婦と生児は部屋から絶対に出ない」とする家が多かった。

夫など男性は、「産室には近寄らない」「産室の敷居は絶対またがない」とする家が多かった。家によっては、夫が産室に入ると「癖になる」ともいい、次に産まれる子供は夫が帰ってくれるまで産まれない、つまり難産になるともいわれた(朴野)。

産のケガレがあるものに対しては神祀りを厳しく制限した。特に家の中ではカマド、カマドの神であるお荒神さんに対してケガレが及ばぬよう注意が払われた。このために産婦が炊事場に入ることを固く禁じ、「火の神さん、水の神さんにはさわられん(触れてはならない)」と姑などが厳重に言い渡していた。

家の中の神祀りについては、姑が代わってすることが多いが、一週間はしないとする家もあり、33日間しないとする家もあった。祭礼の当屋の家に出産があると、33日間は何事があっても「出産があった」という理由で他の者に代わってもらっていた。そのためあらかじめ当屋の人数を多く配分していたという地域もあった。ケガレがある期間については、家族は7日間（厳しいところでは1カ月とする家もある）、生児は33日の宮参りまで、産婦は70日～75日といわれていた。

産のケガレはまた、「オヒイサン（太陽）にあたることもったいない」といわれていた。昭和初期ごろまでは厳格な家では、産婦の夫が出産の翌日に外出する場合には、笠（たけのこ笠）をかぶることもあった（朴野など）。

また、仕事との関わりについては、農家において厳しく守られていた傾向があり、林業従事者や町家は比較的緩やかで、夫と寝室を別にすることによって、ケガレが及ぶことを防ぐとすることが多かったようである。オイヤマ（獵）をしている家では、仲間に迷惑がかかってはいけないということで、7日間は仕事に出ないこともあった。（延野）

5. 終わりに

7日目の「名付け」から産婦はほぼ日常の生活に戻り、この日から奥の部屋から出て家族と食事を共にすることが多かった。このことは家族と火を一緒にすることを意味しており、古くは名付けのことを「火合わせ」ともいった。

女性にとっては不本意ながらも守らねばならなかった産の忌みも、昭和30年代以降、医療施設での出産が増えると急速に消滅していった。しかし、かつてはこの忌みを守ることにより、家族はもちろん地域の人びとも緊張感に包まれ、新しい生命の無事な誕生と健やかな成長を待つことになったのも、否定のできない事実であったと考えられる。

最後にご協力ご指導を賜りました方々のご芳名を掲げ心より感謝申し上げます。

湯浅 裕（請ノ谷 昭和6年生まれ）	谷崎 啓一（朴野 大正8年日生まれ）
太田 孝代（朴野 大正6年生まれ）	能登カズエ（谷内 昭和2年生まれ）
東浦 武次・重子（竹ケ谷 大正1年生まれ、大正5年生まれ）	
大西クニ子（延野 大正11年生まれ）	西原 定子（延野 大正12年生まれ）
幸田八重子（鮎川 大正8年生まれ）	
富田クニエ（雄 大正 5年生まれ）	前川佐代子（雄 昭和18年生まれ）

参考文献

- 『相生町誌』相生町誌編纂委員会 1973年発行
- 『昔のくらし相生町』相生老人クラブ連合会 昭和61年発行
- 『民俗学辞典』民俗学研究所 東京堂出版 昭和26年発行
- 『徳島県下の産育に関する伝説風習俗信調査』梶 完次 昭和11年発行